

までたどり着けない、仮想敵を「対話のプラットフォームに」引きずり出せないといった物足りなさを感じるのは、評者だけではあるまい。

せっかく意義ある問題提起がなされているのに、今ひとつ充足感に欠けるのは、やはり仮想敵（いやむしろ林氏？）が武器としている「因果推論」を同じ“土俵”として相撲を取っていない点にあるのではないだろうか。厳しい言い方をすれば、敵に関する徹底的な分析と課題の洗い出しを避けて、敵の「規範」「専門性」の欠如や、「数値化・可視化の罫」等を掲げて戦いを挑んでも、「おととい来やがれ」と一蹴されるどころか相手にもされないのではないか。言い方を変えれば、多くが納得する教育上の規範を（操作的にでも）明確に定義し、心理学が十八番とする測定尺度論により、不可視なものが妥当性や信頼性を高く担保された状態で可視化され、そして「専門知識にも基づいた」前向き・後ろ向き因果推論の統合による、より厳密な因果エビデンス（芝孝一郎氏（KRSKさん @koro485）の言うところの“ドメイン知識”に基づいた因果推論）が得られてしまえば、本書のような批判の余地は、実のところ無くなってしまうのではないか、という懸念も拭いきれない。

実は、我々の研究チームは、上述のような批判も想定し、自らが流行的因果推論を愚直に应用することから着手した。この点において本書の5章とも通じるものがあるが、我々はさらにそうしたキャッチアップを超えて、EBPM 的因果推論の乱用が、専門家からも「理論不在」「猫も杓子も因果推論」とも揶揄されている現状もあることを認識するに至っている。そこで、EBPM 信者が振りかざす方法論を超える方法論への到達に、本書が目指した解の一つを見いだそうとしている。

ただこうした我々の試みも、本書が訴える「規範」や教育現象や教育実践が持つ固有の文脈に関する専門的な理解と知識、そして歴史的反省無くして、進めることは不可能であろう。そうしないと、すでに敵は教育学の外から、教育現象を全て経済学（学力の経済学だとか教育の経済学だとか題した一般書など）により、半ば強引とも思える解釈までして書き換えようとしつつあり、うかうかしていると全戦全敗、教育学者が不要となってしまう恐れもある。本書の編著者代表である杉田氏や熊井氏は、この問題に関し間違いなく先頭に立って戦うことを意図したであろう。我々は彼らの論に学びつつタグを組んで、EBPM 信奉者の「利益誘導・売名行為」（成田悠輔氏・イエール大学）とも指摘されうる状況について、抗っていかねばなるまい。

尹敬勲著
松本麻人監修

『韓国における大学倒産時代の到来と私立大学の生存戦略』

（ジアース教育新社、2019年、168頁）

大膳 司（広島大学）

本書は、日本よりも早めに18歳人口の急激な減少を経験している韓国の大学をめぐる政府と官僚と私立大学の動きを克明に検討しており、18歳人口減少下における日本の高等教育政策を検討するうえで、大変参考になる韓国大学現代史である。

韓国では18歳人口の減少を背景に、日本に先んじて、大学の統廃合を含む「構造調整」が拡大し、大学現場の既存の価値や秩序を変えようとしている。教育と研究の道を失った教職員はこれからどのように生きるべきか、そして大学はどのように生き残るべきか。本書は、この問いに対する一つの答えとして、能動的に構造調整の時代を勝ち抜く大学の経営、教育、研究の道を提案する。今まさに同じような危機に直面する日本の大学関係者にとって必読の書である。

以下では、本書の目次及び各章の概要を示し、今後の本研究に対する期待を提示したい。

目次

はじめに

序章

第1章 大学構造調整の政策的背景

- 第1節 大学の自律化と高等教育改革
- 第2節 大学財政の自律化と定員削減
- 第3節 大学の授業料依存体質と構造調整
- 第4節 「半額授業料」と窮地の私立大学
- 第5節 「半額授業料」論争と政府主導の構造調整の構図

第2章 大学評価と大学構造調整への圧迫

- 第1節 大学情報公示と大学評価
- 第2節 朴槿恵政府の大学構造改革の青写真
- 第3節 大学構造調整政策の推進形態
- 第4節 大学構造調整の1周期評価の成果と課題
- 第5節 大学構造調整と大学特性化の展開

第3章 大学の特性化戦略と競争力の強化

第1節 大学の統合と連携の道

第2節 究極の実学主義と実務教育戦略

第3節 産学連携と起業家教育

第4節 究極の差別化戦略：韓東大学

第4章 大学構造調整と大学改革の失敗学

第1節 「企業化」する大学経営の副作用：中央大学

第2節 近視眼的大学経営の対価：清州大学

第3節 文化を軽視する大学経営：大真大学

第5章 大学経営と生き残り戦略

第1節 大学運営の透明性の確保

第2節 大学の収益事業の推進

第3節 大学のマーケティング戦略

第4節 大学構造調整のシナリオ

終章 私立大学の生きる道

参考文献

各章の概要

第1章では韓国政治の民主化に伴い大学の自律化が促される中で、大学が財政の自律化を図るための大学構造調整の動向が検討された。特に、大学準則主義による大学の量的拡大と、授業料依存体制が定着することで現れた大学の自律的財政運営の拡大によって生み出された経営状況を踏まえ、韓国の大学の構造調整に至った歴史的背景が検討された。

第2章では、大学構造調整を実施する根拠となる大学評価がどのように実施されてきたのか、その背景と実情が説明された。そして、朴槿惠政権下で実施された大学構造調整の計画と評価方法、そして制裁の中身が確認された。さらに、大学評価の重要なキーワードとなっており、大学競争力の強化の政策基調である「大学特性化」の概要が考察された。

第3章では、大学構造調整の評価結果を踏まえて、大学特性化を推進する過程で優れた取組を展開している大学の事例が考察された。

第4章では、大学構造調整の評価結果を踏まえて、大学特性化及び経営に大きな課題を抱えている大学の事例が分析された。特に、大学構造調整を展開する過程で生じた学内の対立と葛藤、大学を運営する学校法人の理事長や総長による独断的经营の問題が分析された。

第5章では、大学構造調整が展開される中で、大学が生き残るためにはどのような戦略を立てるべきなのかが論じられた。例えば、大学組織運営の透明性の確保、大

学の収益事業の推進、大学マーケティング戦略と大学の自発的構造調整戦略の方法という四つの項目を中心に大学の構造調整時代を生き抜く方法が考察された。

終章では、大学の構造調整時代の幕開けに大きなショックを受けている大学が、構造調整を恐怖の対象として捉えるのではなく、むしろそれを機会として捉え、従来の大学で当たり前と思われていた部分、そして守るべきものとして考えられていた部分を一度疑ってみることから、再度大学の存在価値を確認することの必要性が把握された。

以上、人口減少といった大学にとって環境悪化の状況下、政治的状況変化は、大学にとって死活問題といっても過言ではないことが本書に示された韓国の事例から見取れる。すなわち、韓国のように、保守政党と革新政党がほぼ交互に政権を担う国では、高等教育政策の一貫性が担保されておらず、右往左往させられている様子を行うことができる。

本研究への期待

本書では、2012年から大学の構造調整の波が襲った後、2018年4月までに閉鎖された大学の数は12校と説明された。

2019年から、18歳人口減少に伴う学部学生定員数削減2周期目に入っている。2021年度までに計画は終了することになっており、2018年5月以降に閉鎖された大学の数はどのように変化したのであろうか。

日本でも18歳人口減少が高等教育機関の存続に与える影響について危惧されている。私の入学者数の予測では、来年度からの5年間で80を超える私立大学が閉鎖するのではないかと思われる（大膳，2016）。韓国や台湾など、18歳人口減少の先輩国の様々な施策を参考にしながら、日本政府はどのように対応するのか定員厳格化に続く施策を明らかにすることが必要ではないだろうか。

なお、韓国における近年の大学構造改革を理解するためには、著者の前書『韓国の大学リストラと教育改革 韓国の『大学構造調整』政策の展開と課題』も参考にしてほしい。

注）大膳司（2016）「大学・学部の廃止数の予測—大学入学者の予測値と学部偏差値を用いて—」『戦略的研究プロジェクトシリーズ』X，47-66頁。